Osaka University Knowledge Archive

Title	人を轢き、声を轢く
Author(s)	辻, 明典
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 8-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/40500
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

哲学怪談

人を轢き、声を轢く

辻明典

僕は家路を急いでいた。車のラジオからは、天気予報と一緒に、各地の放射線量の情報が流れている。毎日のように聴いているけれども、その値はいつも変わらない。この道を通るとき、いつも一抹の寂しさに襲われる。僕は寂しさから逃げるように、今日もラジオのボリュームを上げた。

そろそろ、交差点に差し掛かる。信号が、青から黄、そして赤へと変わる。僕は少しずつスピードを落とし、車を停めた。停めた車の中で、僕はまたラジオのボリュームを上げた。岸壁に打ち付けられる波の音が、微かに聴こえる。今日は、海が荒れているようだ。聴きたくない。波音を掻き消すために、またラジオのボリュームを上げた。どんな番組でもかまわなかった。

信号が青に変わる。僕は、念のため、両目で左右を確認した。もやがかかっている。安心などできない。気をつけねばならない。それは、僕に課されてしまったものだ。意識ではない意識だ。右足でアクセルを踏み込むと、僕の心はいなくなってしまった。心ここにあらず、いや、そうとも言いきれない。

人はいない、家など、この辺りにはないのだから。そんなのは、わかりきったことだ。でも、僕に向けられた声が、声を発しないままに、僕を縛っている。僕に向けられた声。それは、誰も呼びかけることはない。細く、蜘蛛の糸ような繊維が、僕の意識をひっそりと、しかし確実に縛っている。

声の聴き方を忘れてしまった。気づかぬままに、忘れてしまったのだ。内なる声は、いつの間にか聴こえなくなってしまった。声の届き方も、わからない。白状すれば、心の底では、声を聴きたくないと

Bertolt Brecht Leben des Galilei
Adorno Minima Moralia
Adorno Negative Dialektik Jargon der Eigentlichkeit
Lukacs Ästhetische Theorie

も思っていた。聴きたくなかったのだ。

しかし、声の持ち主は、突然に、ゆっくりとした足取りで、僕の車の前に現れた。目を閉じる暇はなかった。両腕に力が入ったせいで、一瞬遅れたと思ったが、右足でブレーキを踏み込む。僕の身体は、強い勢いで前方に引っ張られた。そのとき、僕は、その声の主と目が合った。年老いた目をしていた。にらむのではなく、高ぶる感情を押さえきれぬような目で、一瞬の間を突くかのように、僕の両目をじっと覗き込んできた。充血し、真っ赤な血管が浮き上がった両目を、かっと見開きながら、僕の内側に迫り込んでくる。一瞬だけ、その人の口元が緩んだ。すると、まるで穴にでも吸い込まれるように、その人は車体の下に巻き込まれていった。両目を反転させ、真っ白な目を一瞬だけ見せながら。口は半開きだった。その頭は強く地面に打ち付けられ、ぐわんという重々しい音が響く。その音は、運転席でもはっきりと聴こえた。

生まれて初めて、人を轢いた。「人を轢いてしまった」という確信があった。ぐにゃりとした感触が、ブレーキを踏んだ右足から、僕の身体に伝わってくる。悲鳴は聞こえなかった。声の聴き方を、忘れてしまったのだから。でも、ラジオから流れる音は、はっきりと聴こえている。

震える左手でサイドブレーキをかけた。乾いた木材が折れたような鈍い音が、耳に残って離れようとしない。息を整えることなどできず、僕は鍵を左に半分だけまわした。二つつなぎの嫌悪が、僕の心臓をえぐってくる。僕の左胸は、僕が犯した罪を突きつけるように、今にも破裂しそうな音をならしながら、内側から僕の身体をえぐりだす。こんなときでも、やはり疾患が気になる。狂ったような鼓動が、辛うじて保たれた均衡を崩すかのように、僕の内側に巣食っている。心臓が、ピンと張った粒子の糸によって編まれそうで、無性に胸を掻きむしりたくなる。人の安寧を奪っておきながら、真っ

先に我が身を案じるとは、僕は残酷な心の持ち主であるようだ。

急いで車外に出た。空は雲に覆われ、月明かりさえ朧げにしか見えない。街灯もない。狂気の影が忍び寄るなかで、いかに正気を保てばいいのか。容赦ない高波に打ち付けられた岩場の悲鳴が、すぐ近くから聞こえてくる。砂塵をのせた潮風が、容赦なく僕を痛めつけてくる。乾いた口は閉じることを忘れ、じゃりじゃりした砂粒が、歯と歯の間に入り込んでくる。僕は腰を屈め、車の下を、砂を噛んだままに、覗き込んだ。恐怖の感情すら、繊維の束に縛られてしまったためなのか、僕にはわからなくなってしまった。

人を轢いてしまった。しかし、声の主は何処にもいない。懐中電灯をともしながら、僕は車の下を覗いた。血痕もなければ、遺体もない。そして、声も聴こえない。安心はした。でも、怖かった。

僕は深々と息を吐き出した。そして、立ち上がろうとした。ここを離れなければいけない。そう思った。思ってしまったのだ。その瞬間であった。僕は腰のベルトをぐっと捕まれ、わけもわからず、急に後ろに引っ張られた。僕はとっさに顎を引いたのだが、少しだけ丸まった背中が、まだ舗装されていない道路に打ち付けられて、思わずうっとなった。しばらく、呼吸がうまくできなくて、その上、じゃりじゃりした口のなかが乾き始めて、苦しくてたまらない。肋骨の内側が、ぐっと締め付けられたみたいで、息ができない。胃がねじ切れそうになるのをこらえられなかった。燃え上がるような液体が、喉元を突き刺しながらわき上がり、口元から溢れ出す。僕は息を吸うために寝返りを打った。そのとき、地面がぬれているのがわかった。土の表面の砂利が、液体と混ざりあい、どろどろと、僕の掌にまとわりついてくる。さびた鉄のようなにおいが、僕の近くを取り巻いている。真っ赤に染まった異臭に支配されていた。息を整えるまで、何分かかっただろうか。砂塵が口の中に入ってこないように、鼻からゆっくりと息を吸いつづけた。

悪寒がする。身体が震えた。声は聴こえない、ただ、ラジオの音だけははっきりと聴こえる。僕は人を轢いてしまったようだが、轢かれたのは僕だったのか。罪の意識は和らいだが、僕はますます僕を縛ってしまったのだ。それだけは、はっきりとわかっていた。

つじ　あきのり（文）
南相馬市立原町第二中学校講師、てつがくカフェ＠せんだいスタッフ。福島県南相馬市内で、哲学カフェを展開中。

おぎの　りょういち（写真）
臨床哲学／美学／文化研究、演劇制作者．上智大学文学部哲学科卒．大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室博士前期課程在学中．
考えること、あらわすことの様々なあり方／かたちに関心を寄せています。
今年は、これまでの写真作品についても整理・発表を試みたいです。